

「リボンの騎士」

『リボンの騎士』手塚治虫（講談社）

倉井香矛哉

手塚治虫「リボンの騎士」には、「日本のストーリー少女漫画の第一号」とする作者の「断言」以後、少女マンガの原型とする桜井哲夫、ストーリーマンガを少女雑誌に持ち込んだことを評価する米沢嘉博、重層化したストーリーを評価する陳筱燕らの研究がある。一方、岩下朋世は「リボンの騎士」の特権性を問いただし、石田英助の「カナリア王子さま」や手塚の「ナスビ女王」、「エンゼルの丘」と比較した。

また、手塚は執筆開始にあたって宝塚歌劇の舞台を参照した。藤本由香里、押山美知子はこの影響関係を肯定するが、中野晴行は男役が男と女を演じ分ける点に宝塚との異同を読み取り、映像的な手法へと移行する過程として位置づけた。

ストーリー分析として、竹内オサムはコスチュームブレイ、衣装の差異に着目し、両性具有的な設定を両義的に生きる（分身の発想）を手塚マンガの人間像に位置づけた（藤本も「分身」という表現を用いるが、精神性⇨性自認を重視する点が異なる）。その他、輪郭⇨衣装・皮膚の内面への作用を指摘する大野晃、トランスヴェスタイト（服装倒錯）系に位置づける斎藤環、性別越境が服装や行動などの表層的なレベルに終始することに可能性と限界をみる押山らがいる。

ジェンダー表象をめぐって、東玲子は活発な女子でありながら「いい子」から逃れられないサファイアの姿に発表当時のジェンダー規範の制約を読み取った。押山や岩下は手塚マンガの記号的キャラクターが本質的な性差を欠くことの性別イメージを逸脱しつつ強化する矛盾を指摘した。大城房美は少女マンガにおける「女性の主体性」と「お姫様」の共存から少女マンガ⇨少女が既存ジェンダー観を脱する過程で自分の変化を意識するジャンルと位置づけた。中川裕美は「リ

ボンの騎士」から「美少女戦士セーラームーン」に至る「戦う少女」のジェンダー規範を問題化した。

その他、竹内美帆は小学生を対象とするアンケートを行い、後の世代へと読み継がれていく可能性を示唆した。大城房美は北米において日本のマンガがアニメとは異なりほとんど知られていない状況を報告した。

今後の研究課題として、変装時の呼称⇨「リボンの騎士」が表題化されたこと、男/女、心/身体、天使/悪魔、善/悪の転移、悪魔メフィストのヘル夫人への書き換え、ヘケートサファイアの（恋愛を脱中心化した）レズビアン表象としての読みが残されている。